

親鸞聖人を超えて

超えるとは

聖人を超えるとは、聖人をすてることではない。そして聖人を去ることではない。真に聖人の生きんとせられた宗教の本質を生かし、聖人の生きんとせられた道を生きんがための考察であります。

言いかえると、親鸞聖人が法然上人の前に立たれた態度、法然上人が善導の前に立たれた態度を、親鸞聖人の前に立つ我等が学んで、真に忠実に師教に随順することによつて、新しい我を発見し、より深く如来の本願海を信嘗しんじょうしようとするに外なりません。

愚禿の真面目

そうしたことを考えるに先だつて、我等は聖人の学的態度を学んでおかねばなりません。それによつて親鸞聖人に学ぶ我等の態度を知りたいと思ふのであります。

「たとえ法然上人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候。」とは聖人の教法に對する絶対随順の真面目を表白せられたものであります。我等も亦嚴肅なる態度をもつて、忠実に師教の前に立たねばなりません。

天上天下唯我独尊と叫んで、仏陀世尊の自覚に立ち上つた釈尊の尊高は、やがて大地に愚禿と名告つて、教法に絶対随順せる親鸞を生むことによつて、天上のものが大地の群生のものとなりました。

しかし聖人のこの教法絶対随順の態度とは、迷妄の心が師教によびさまされて、師教の上に唯一絶対の真実を確認した相であつて、決して盲目的な溺れる者が藁でもつかむといった世界を意味するのではないのであります。

私は今、如来の無我の血液が、より純粹に、我等の上に、人格から人格の上を流れる、その転廻の様を味わねばなりません。

觀無量寿經には、真実の浄土に往生する者の上には、一には至誠心、二には深心、三つには廻向發願心を具足することを誓ひ、大無量寿經には、如来の本願に、至心、信樂、欲生我国の三心を誓われてあります。至誠心と至心、共に真実心に外なりません。

その至誠心を善導は解釈して、

「至誠心、至は真なり、誠は実なり。一切衆生身口意の業、所修の解行、必ず須く真実心の中に作すべきことを明かさんと欲ふ。外に賢善精進の相を現し、内に虚仮を懐くことを得ざれ。」と申されました。

不得外現 賢善精進之相 内懷虚仮

善導のこの「内も外も共に誠なる聖者たれ」という至誠心の積を、真に受け取つた者は法然でありました。法然上人は如何にこれを味わつたでしょうか。法然上人の『往生大要妙』に曰く

「文につきてこまかに意ふれば、外に賢善精進の相を現し、内に虚仮をいだくことを得ざれというは、内には愚にして外には賢相を現し、内には悪をのみつくりて外に

は善人の相を現し、うちには懈怠にして外には精進の相を現ずるを虚仮とは申すなり。外相の善悪をばかえりみず、世間の謗誉をばわきまへず、内心には穢土をもちとひ、浄土をもねがひ、悪をもとゞめ、善をも修して、まめやかに仏の意にかなはんことをおもふを真実とは申す也。真実は虚仮に対する言葉なり。真と仮と対し、虚と実と対するゆへなり、この真実虚仮につきてくはしく分別するに、四句の差別あるべし。

一には、外をかざりて内にはむなしき人

二には、外をもかざらず、内にもむなしき人

三には、外はむなしく見えて内はまことなる人

四には、外にもまことをあらはし、内にもまことある人

かくの如きの四人の中には、前の二人をばともに虚仮の行者というべし。後の二人をばともに真実の行者というべし。しかれば、ただ外相の賢愚善悪をばえらばず、内心の邪正迷悟によるべきなり。をよそこの真実の心は、人ごとに具しがたく、事にふれてかけやすき心ばへなり。……………」

以上の文をうかがえば、法然も亦内外相応の聖者たらんとせられてあります。法然は更に「さしも久しく心をはなれぬ、名利煩惱の心であるから、断ちきろうと思つても安らかに離れがたい心であるとおもつて許さるゝ方もあるが、それは許すべきことでないから、我が心をかえり見て、誠めなほすべきことである。」と言つています。

殊に四句の差別をたてられたのでいよいよはつきりして来ました。聖人は厳肅にこの師教の前に立たれたのであります。この鏡の前に現われた相は一体、どんな相であつたのだろうか。

愚禿が心

聖人は『愚禿抄』に自己の相を告白されました。

聞賢者信顕愚禿心

賢者信内賢外愚也

愚禿心内愚外賢也

賢者とは師匠法然上人であり、愚禿とは聖者になりきれない第一句の「外をかざりて内はむなしき」凡夫の発見であります。ついにここには底なき煩惱名利の深淵に直面して、如何とも出来ない愚禿それ自身が動いています。

聖人は遂に聖者たろうとする心をすてました。そうして偽らない自己を真実に凝視しました。聖者ではない、しかしごまかしではない。聖者への世界へ高まろうとする願いをすてて、如来の本願に凡夫さながらの相のまままで帰命せられました。

ここに聖者から凡夫への転回があつたと共に、如来の大悲は善人正機の世界より、悪人正機の世界に転入しました。善人よりも、賢者よりも、悪人をこそ、愚者をこそ抱きあげずにはいられない所に、如来の本願の素顔があらはれたのであります。悪人正機の大悲こそ、げに自然の浄土より神通示現する如来の久遠の秘密であつたのであります。

ここに善導から法然へ、法然から親鸞への大転廻がありました。そうして聖人のこの純粹なる信の世界こそ、善導や法然の胸中に流れていた信境の発展であったのであります。

さればさきの至誠心積をも

「外に賢善精進の相をあらわすことを得ざれ、内に虚仮を懐けばなり。」とお読みになりました。

我々は先ずこの聖人の信境の前に厳肅に立たねばなりません。